

## 第2回 健康・医療情報と新聞

2007年10月9日

毎日新聞科学環境部副部長 鯨岡秀紀

毎日新聞は今年4月の紙面改革で、生活関連情報を充実させるべく、「暮らしナビ面」をスタートさせた。医療・健康に関するページは、それまでの週1回1ページから、医療面と健康面を週1回ずつの計2ページ掲載するスタイルとなった。

<背景>には、健康や医療の情報への関心の高さがある。テレビにも健康情報の番組が多数あり、書店に行けば健康雑誌がずらりと並ぶ。健康や医療の情報への関心の高さは以前から続いていることで、最近始まったものとはいえないが、新聞が生活情報重視へと向かう中で当然充実すべき情報と位置づけられ、ページ数が増やされた。

<医療面>は火曜朝刊に掲載している。紙面の基本的な構成は、「アルコール依存症」のように病気の仕組みや治療法などを解説するメイン記事と、「病院の選び方」のような外部の識者に執筆を依頼している連載から成る。そのほか、医療関連の催し物の案内を掲載する場合もある。メイン記事については、2～3人の医師へ取材し、患者も1人は取材するのが一般的で、患者の体験談と医師の解説から構成している。

<健康面>は金曜朝刊に掲載している。紙面の基本的な構成は、「高齢者の転倒予防」のように健康関連の内容について紹介するメイン記事と、キャンペーンを続けている糖尿病関連の連載、「健康Q&A」という身近な疑問に答えるコーナーから成る。そのほか、健康関連の催し物の案内等を掲載する場合もある。

<紙面作り>をしていくうえで最も気にしているのは、いかに患者に役立つ情報を提供していくかということだ。しかし、それは簡単なことではない。例えば、臨床試験を経て登場したはずの期待の新薬で、副作用死が多発したケースがあることなどはその典型だろう。そうなると、副作用死多発後には「新聞も安易に使用を煽った」という批判が出る。医療・健康報道の現状と問題点などを論じてみたい。